Keio Research Center for the Liberal Arts

Newsletter 17

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第 17 号 /2011 年 1 月 15 日発行

Contents

巻頭言　来往舎からアカデミア・アルカディアへ

特集Ⅰ　知への扉を開くとき
知への<導きの糸>――アカデミック・スキルズの今後の展開 / 【研究も教育も】プラトンを読むこと / 知識を獲得する過程を大切にする / 教養教育の入口で

特集Ⅱ　教育 GP 活動報告

特集Ⅲ　ワークショップ「Alfred Tennyson,"The Lady of Shalott" の創造的解題」/ 日吉ポエトリー・フェスティバル /2010 年度日吉キャンパス公開講座 / 秋学期の HAPP の活動 / 学び場プロジェクト / 庄内セミナー

ニュースフラッシュ　慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会 / 基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」新グループ発足 / 教員サポート / サイエンス・カフェ／アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション

私の○○自慢

来往舎からアカデミア・アルカディアへ

教養研究センター所長
不破有理（経済学部）
Yuri Fuwa

教養研究センターが設立されてから 9 年目を迎えました。横山千晶前所長から 3 代目を 2010 年 10 月より引き継ぎ、新しい体制で臨みます。来往舎とはご存知の通り、「来往軽く、（濁世にも）一同の談笑は清い」という福澤諭吉の漢詩に由来します。来往舎と対となるような「新萬来舎」は戦後、新たな学問と交流の活気を復活させる場として設計されました。来往舎・萬来舎の由来にふさわしく、「人の流れと笑いのあるアルカディア」と「学問と交流のアカデミア」とすべく模索し実行していきたいと思います。今回から【研究も教育も】と題した「研究と教育の情報交換」のコラムを設けました。研究と教育という大学教員を支える両輪を潤滑に動かす一助として、自由闊達に研究・教育を語り合い、議論（喧嘩は無用）するような時間と空間を創りたいと願っています。

1　多様なリテラシーを求めて

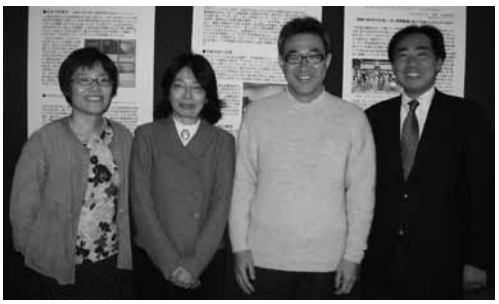
現在のアカミック・スキルズに加え、来年度は実地調査方法や試行的に英語版も開設します。学生に求められる様々な領域の学問的手法を教養研究センターとしても提示する必要があると考えました。同様の問題意識から、基盤研究として新たに「多様なリテラシー研究」を掲げます。柱の一つは「身体知」、そしてもう一つが「メディア」です。身体知は目下進行中の教育 GP 活動の根幹をなす概念です。五感と想像力を用いてテクストに向き合うとき、言語の意味がすっと立ち上がる瞬間があります。そのような感動と再認識を通して深い理解と表現力を学べるような創造的教授法を探っています。

メディアにおけるリテラシーの研究は今回の新企画です。リテラシー（英：literacy）とは通常、読み書き能力と訳されますが、もう一歩進んだリテラシーが求められる時代であると思います。文字の情報に加え、映像言語など非文字の対象をも批判的に読み解き、多くの情報の中で、情報自体を識別して、能動的なクリティカルな理解を示すことが求められます。さまざまな媒体によって発信される情報への批判的視点を養うためにはどのような教育が必要なのか。「究極のアカデミック・スキルズ」を目指して研究会を開催していく予定です。

2　教員サポートとしての研究成果の発表へ

教養センターの選書もおかげさまで毎年複数の応募が集まるようになりました。さらに新たな発表・刊行媒体を充実させていきたいと考えています。「研究の現場から」と題して、ご研究について自由に語っていただく企画も進行中。また研究会・ワークショップへの補助をささやかながら始めたいと策定中です。今後の研究と交流の場となれば幸いです。ちなみに、ニューズレターは活動の予告にも力点をおくべく、刊行の時期を変更します。次号は 5 月発行予定です。

さまざまな研究分野をもつ教員が集うセンターだからこそ可能な多様な試みをご一緒に進めましょう。日吉キャンパスが、学部・キャンパスを横断する学びのダイナミズムの拠点となることを心から願っています。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。



『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』（*Les Très Riches Heures du duc de Berry*）として知られる 15 世紀フランスの写本「3 月の暦」より。いよいよ「ドラゴン」登場です。図像はリュジニャン家の城で、右側の塔の上部には一家の祖先に富をもたらしたと伝えられるメリュジーヌがドラゴンの姿で描かれています。

知への＜導きの糸＞——アカデミック・スキルズの今後の展開

アカスキという略称で定着した感のあるアカデミック・スキルズですが、その理念は受験という難関を通ってやっと大学の門に辿り着いたものの、そこから先に広がる茫洋とした光景を前に立ち竦んでいる学生のアリアドネの糸になることでした。いうまでもなく大学というアカデミックな場では、批判的な視点と論理的な思考が重要な役割をになっています。アカスキはこの２つを習得するための導きの糸となることが目標でした。

アカスキの提供しているアリアドネの糸は２本あります。アカデミック・スキルズⅠ／Ⅱとアカデミック・スキルズⅢ／Ⅳです。前者に関してはすでに多くの先生方に協力していただいているので、授業内容をご存じの方も多いと思います。春学期は論文・レポートを作成する上で必要なものを学ぶことで、論理的思考の基礎を打ち立てます。秋学期は学生は論文作成に加えて、プレゼンテーションで論理的に説明をする実践をします。そして最終的に学生はプレゼンテーションと論文集という形で成果を発表してきました。ところで2011年度から、新たな試みが始まります。それは英語によるプレゼンテーションと論文作成を最終的に目指すコース、英語版アカスキです。これは近年の大学の国際化の流れを受けて、日本語に限らず多言語による論理的な文章作成あるいは口頭発表ができる学生の育成を目指す試みです。

アカデミック・スキルズⅠ／Ⅱを修了した学生向けに開講しているのが、アカデミック・スキルズⅢ／Ⅳです。2011年度からは３つのコースのうちから、自分たちのニーズに合わせたものを選択できるようになります。１つは古典から新聞・雑誌記事に至るまで徹底的に文献を読解していくコース。もう１つは視覚言語を用いた映像、身体言語を用いた演劇など、文字以外で表現されたものを主として対象とする批評と創作のコース。最後に、これも英語版アカスキと並んで2011年度から新たに展開するコースですが、現実の社会で飛び交っている記号＝情報を採取して分析していく実地調査のコース。

これらのアカスキのそれぞれのコースは、アプローチの仕方や次元は異なりますが、いずれも多かれ少なかれ学生自身の所謂リテラシーの力の開発と関わっていると思います。そして膨大な情報の中から自分にとって必要なものを抽出していくこのリテラシーの力は、最終的には批判的な視点と論理的な思考とを養うものになるはずです。

スタディ・スキルズという名の実験授業から始まったアカスキも今やさまざまな形で展開されるようになってきています。しかしアカスキの理念である学生のアリアドネの糸となるという点は今でも変わりません。そして少し大げさですが、学生にとってこのアリアドネの糸が、単なる知の技法であることを超えて、真の人間理解につながってくれればすばらしいことだと思います。

（大出　敦）

科目		内容
アカデミック・スキルズ Ⅰ・Ⅱ	知の基礎を築く（3クラス）	論文・プレゼンテーションに必要な主題の立て方、文献検索、情報整理などを実践的に学習するもの。
	知の基礎を築く＜英語版＞（1クラス）	英語による論文作成とプレゼンテーションを最終的な目標とするもの。
アカデミック・スキルズ Ⅲ・Ⅳ	読書から批評へ（1クラス）	さまざまな文献を批判的に読み、論理的な思考展開の育成を目指すもの。
	批評、創作、コミュニケーション（1クラス）	映像、演劇などを通して視覚言語・身体言語による芸術の批評・創造を目指すもの。
	実地調査（1クラス）	実際に社会に出て、さまざな調査をするための技法を学習するもの。

開くとき

知への扉を

研究も教育も

プラトンを読むこと

私の研究分野は西洋古代哲学で、幅広い時代と範囲を扱っていますが、中心は古典期アテナイの哲学、特にプラトンです。プラトンという西洋哲学史に聳える巨人に挑むことで、様々な哲学的視野を得て、最後は自分自身でとことん問題を考えていきます。人間の幸福はどう実現するか、魂の善さや正しさとは何か、といった生き方への問いから、宇宙や存在の根源、さらに、それを考える私たちの言葉と論理に至るまで、哲学はあらゆる問題を扱っていきます。

古典ギリシア語で原典を読み、先行研究を検討しながら解釈と議論を組み立てる作業は、学術研究の王道とも言うべき厳しい過程です。しかし、それは1人で閉じこもって黙々と行なう思索ばかりではありません。大学の講義やゼミで意見を交換しながら自分の考えを見直し変えていく、創造的な共同作業です。また、プラトンを共通テーマとして、日本の仲間だけでなく欧米やアジアの異なった文化背景の研究者とも、哲学の問題を議論しています。2010年夏には三田キャンパスで国際プラトン学会大会を主催しましたが、そこには世界30カ国から130名の研究者が集って、200名ほどの日本人研究者・学生と、プラトンの主著『ポリテイア』（国家）について1週間にわたって熱い議論を交わしました。

共通教育科目で担当している「哲学」でも、プラトン対話篇をよくテクストに使います。プラトンはソクラテスらがくり広げる対話を日常の言葉で著しており、前提知識はほとんど必要ありません。しかし、一見平易な議論は哲学問題の宝庫で、その奥行きは果てしありません。哲学の入門にあたる大学の授業は、一生のなかで各自にとってかけがえのない意義をもつと思っています。人は誰もが哲学を心に生きていかなければなりませんが、それに正しくしっかりと向き合えるのは、大学生の間だからです。プラトンはそんな私たちの良き対話相手、導き手となってくれます。

（納富信留）

知識を獲得する過程を大切にする

私が学部生として慶應大学に入学したとき最もフラストレーションを感じたのは、多くの授業で完成された知識が披露されている点でした。それぞれの講師がいかにして知識を獲得したのかという苦労話をほとんど聴けず、私のように「どのようにして学べばよいのか？」といった意識をもった学生に応えてくれる授業はありませんでした。

そういった意味で教養研究センターが提供するアカデミック・スキルズは、私のような「何か学びたいけど、何をどうやって学べばよいのか」という悩みを抱えている学生にとって大きな意味をもつものです。

大教室の授業に代表されるような、完成された知識を学生に伝えることが研究を教育の場に還元するベストの方法とはいえません。アカデミック・スキルズのような、知識を獲得する過程を大切にする取り組みは、私のような「不幸な学生」を1人でもなくすものとして、今後も力を入れていただきたいセンターの授業の1つです。

私はちなみに、18・19世紀のヨーロッパにおける「馬」の社会的・文化的・経済的な位置づけについて研究しています。

（光田達矢）

教養教育の入口で

研究と教育の連関について一文を寄せよということですが、日吉に着任してまだ一年半、定見を持つまでには至りません。教養教育ということに関しては全く手探りの状態です。ただ、語学の教師としてフランス語を教えることが、結局のところ自分の専門とそう遠くはないということを、常に感じてきました。私の専門はフランスの詩です。フランス近代、ロマン主義以降の歴史的文脈において、文学と芸術が成立してゆく過程を探究しています。ところが、そのような学問的課題とはまた違った位相で、作品の美的価値に触れ、それを紹介するということも文学研究の大切な使命なのだと思います。そして、詩は言葉の基盤をなす肌ざわりにかかる分野ですから、フランス語の発音を入学したての学生さんたちと練習し、動詞の活用の復唱をするようなとき、詩的実践にかなり近いところにいるように感じています。これで教養教育として用をなすのかは分かりませんが、幸せなことです。

（原　大地）

教育 GP

セクションⅠ「アート」
古典を舞う——新たな文学の授業をめざして

2010 年度のセクションⅠ「アート」では古典作品を身体知を用いて解釈する企画が続々登場し、いずれも好評を博しました。7 月 2 日開催の「THIS IS KYOGEN——言葉 × 身体 × 感性」は言葉と身体が融合した古典芸能である「狂言」の企画です。公募学生が運営全体を担い、自分たちのアイデアをカタチにする喜びを体感し、共同活動を通してあらたな気づきを得る機会となりました。当日の舞台は 1）プレトーク、2）狂言「盆山」、3）狂言体験コーナーからなり、実際に動物の声を参加者が体験するなど、初心者にも親しみやすく楽しめる工夫がみられました。当日は 200 名近い来場者があり、その約 4 割が狂言鑑賞は初めての方々でしたが、有意義で楽しかったとのアンケート結果が出ました。7 月 17 日と 18 日には「シリーズ　シェイクスピアを遊ぶ！　第 2 弾『ロミオとジュリエット』と『ハムレット』リミックス」が開催されました。初日はスタッフと講師による朗読とディスカッション、戯曲家・演出家の松井周氏（劇団サンプル主宰）によるドラマ・ワークショップで、2 作品をリミックスし作品を比較しました。2 日目はシナリオの解釈、書き換え、演ずることで新たなシェイクスピアの創造を体験。スピード感とシナリオの構成において対照的な両作品をぶつけることで、シェイクスピアの作品に共通する言葉の使い方や思想そのものを味わうことができました。ワークショップ「Alfred Tennyson, "The Lady of Shalott" の創造的解題」は 9 月から 11 月まで 3 シリーズを実施しました。いずれのセッションも古典の再評価と新解釈発見の連続で刺激的な企画となりました。10 月 27 日は現代詩のワークショップ、10 月 29 日は「日吉ポエトリー・フェスティバル」が開催され、詩が発する身体言語に圧倒されました。詳細は特集Ⅲをご覧ください。

（不破有理）

セクションⅡ「フィールド・アクティヴィティ」
出て、会う

フィールドワーク実践は三田と日吉でそれぞれ形を変えて実施しています。ここでは今年度春学期日吉設置総合教育科目「社会学I」での実践を紹介しましょう。水曜日の 2 時限目（来年度は金曜 2 時限目）に設置されたこの授業では、まず教室を出ることからスタートします。日吉の家を拠点にします。これは空間、建築構造と人間関係や議論の相関を実感する実験でもあります。壁がない、畳に座る、といった何気ないことがらが身体を触発します。実践としては細かいステップで、他者と関わることを実地にこなします。小グループどうしで、初めて出あって、話を聞く。それぞれが違う人物設定をして、インタビューしあう。これらを通じて、他者を調べる（フィールドワーク）ことの相互的な成り立ちや、そこに生じえる感情の起伏などを経験します。次にゲストを呼んで、自由に聞き取りをする訓練です。ゲストは頸椎損傷で四肢が不自由な方です。一方で、障害者のセックスに関して積極的に発言したり、実践している方です。参加者は、障害とセックスという、普通の人間関係では表面化しにくいことに直面しなければなりません。何をどのようにどこまで聞けるのか。そして聞いた事柄をどこまで公開できるのか。参加者はグループごとにかなり戸惑ったようですが、この経験こそ、フィールドワークの真骨頂です。この他に、携帯カメラを使用しての日吉調査とプレゼン。自由課題と自由な方法によるリサーチ実習を行いました。通年で行って欲しいとの声が聞かれましたが、集中して授業参加してくれた学生には感謝します。

（岡原正幸）

セクションⅢ「コミュニテ
横浜のかどっこ——「

2010 年の 4 月 4 日にオ
の活動はこの秋からます
6 月 15 日の火曜日に開始
から秋にかけて寿地区、
数多く参加されるようにな
食べる「健康スープ」は
の腕の見せ所となっていま
武藤浩史先生作詞作曲の
称）に横浜在住のコンテ
美香さんが振付をし、カド
スが出来上がりました。ま
時の気分を句にして読んで
ば」と「からだ」をつなぐ
「動く教室」だけではあり
しでも知ってもらおうと 10
他大学の学生やフェアトレ
ェアトレードファッションショ
ー」を開催しました。モテ
をはじめとした住民、そし
して 11 月 13 日からは毎月
モノを地モトで」を合言葉
ヤで始まりました。地元農
ではなく、健康を合言葉に
のかを考えていこうという
社、NPO「さなぎ達」、
慶應の教員、そして寿を
力し合ってアイディアを出し
とば」と「からだ」をつな
を展開していきます。売ら
教室」の健康メニューも
です。ぜひとも皆さん、
い。「動く教室」について
ac.jp/news/20101005.pd

ィ」

カドベヤ」はとまらない！

ープニングを祝ったカドベヤ
す活気を帯びてきています。
された「動く教室」には夏
そして周辺の住民の方々も
りました。動いた後に皆で
は地元のおじさんシェフたち
ます。この夏には法学部の
の「んだんだレゲエ」（仮
ンポラリーダンサーの黒沢
ベヤのオフィシャル健康ダン
た体を動かしながら、その
でいく〈動く俳句〉も「こと
ぐ楽しい恒例となっています。
りません。このカドベヤを少
月10日には慶應の学生が
ード団体と協力し合ってフ
ー「まちカドファッションショ
ルは学生と地元のおじさん
て地元で働く方々です。そ
月第2・第3土曜日に「地
業に「おとなり市」がカドベ
農家の新鮮野菜を売るだけ
にどう地元に発信していける
試みです。コトラボ合同会
慶應や他大学の学生たち、
はじめとした住民たちが協
し合いながら「モノ」と「こ
ないだ、今までにない朝市
られる新鮮野菜から「動く
数々生み出されていく予定
カドベヤに足を運んでくださ
ては http://lib-arts.hc.keio.
f をご覧ください。

（横山千晶）

セクションⅣ「コミュニケーション」

多世代対話の場づくり──非講成エンカウンターグループ

夏休みの終盤、2010年9月12日から16日にかけて、非構成エンカウンターグループを山梨県清里の清泉寮で開催。20代前半の学部学生から50代まで全国から14名の参加者が集まり、ファシリテーターの橋本久仁彦さんとともに、4泊5日合計12セッション（36時間）の対話を行いました。

エンカウンターグループは、パーソンセンタード・アプローチを提唱したアメリカの臨床心理学者、カール・ロジャーズが始めたグループセッションです。あらかじめ議題や目標が与えられることはなく、メンバー同士がその時その場に確かに存在する声、感情、思いを語り、聴きあいながら、自己や他者に触れていきます。

教育GPの一環として実施した理由は、思考や知識の交換だけではなく、言語を通じて自他の感情や存在に出会っていく、つまりコミュニケーションの基盤を支える自他への感受性を高めるというエンカウンターグループの特性が、根源的な言語力の醸成につながると考えたからです。

今回は幅広い世代の人々が参加したことで、非常に濃密で活発なグループになりました。異世代間の真剣な対話を通じて、若い世代は経験豊富な「大人」の弱さや誠実さに触れ、また年長者たちは学生の真摯な姿勢に刺激を受ける。座学では体験できず、通常の社会生活でも生じにくい多世代の対話によって、相互の人間的な成長が促され、それに応じて言語感覚が研ぎすまされていくという貴重な場になったと考えられます。

（坂倉杏介）

セクションⅤ「発信・評価・システムデザイン」

ほんとに本を好きになるために

「ほんとに本を好きになるために」。実験授業「エディティング・スキルズ」に参加を呼びかけるポスターに書かれていたことばです。本が好き、もっと好きになりたい、自分で本を作ってみたい──でも、そんな学生たちが本当に来てくれるのか、わたしたち担当者も半信半疑だったのですが、さいわい、説明会にはたくさんの学生たちが集まってくれました。

本を作るのであれば、コンピュータ上で組版をおこなうDTPに習熟することは必須です。でも、それだけでは何か足りない。ものづくりの悦びを体感しながら、編集と出版のプロセスを学生たちと共有したいと考えました。

春学期の活動の中心となったのは、製本家を招いての製本教室と、学生ひとりひとりの「手づくり本」の制作。それと並行して、担当教員による本の歴史と可能性をさぐるミニ講義、プロの編集者による実務とソフトウェアの使用法を学ぶワークショップをおこないました。

秋学期のテーマは成果を形にすること。まず教育GP企画“Hiyoshi Poetry Festival 2010”のための対訳詩集を編集。また本稿の執筆時点で、日吉メディアセンターでの「手づくり本」の展示と、日吉生協の書籍売り場をデザインするブックフェアのプロジェクトが進行中です。これは本づくりの原点（手作業）と終点（流通）をともに提示する試みになるでしょう。さらに「エディティング・スキルズ」の同人誌と法学部フランス語ニューズレターの年度内刊行を予定しています。

学生たちを主役とした以上の作業とは別に、このセクションⅤには、教育GPの活動全般にわたるシステムデザインをになう役割もあります。「発信・評価・システムデザイン委員会」を組織して、参加者への調査票の作成とそれをフィードバックする方法、各セクションの連携について検討をおこなっています。

（笠井裕之）

ワークショップ「Alfred Tennyson,"The Lady of Shalott" の創造的解題」

3シリーズに分けて開催された「シャロットの女」のワークショップは、いずれもテクストの精読・朗読から創作にいたる過程を経て、学生にとっては能動的な発話・発表の場となり、教員にとっては文学の題材を創造的に教室で扱う手ごたえが感じられる企画となりました。9月6－8日のワークショップでは連日、詩行に向き合い Andrew Lynch 教授による解釈と分析、文学座俳優・脚本家瀬戸口郁氏の指導のもと、群読を通して身体全体を用いた発声と表現方法を学びました。10月27日には世界的な舞踏家笠井叡氏をお迎えして、オイリュトミーによる言語の音と身体の動きを一致させる参加型ワークショップを行いました（右写真参照）。綿密な詩の韻律分析に基づきオイリュトミーで表現してくださった笠井さんに敬意を表するとともに、おそらく本邦初の「シャロットの女の舞踏」に深い感銘を覚えました。11月5日には小関章ラファエル氏が創作者の視点から物語分析方法を提示しました。ご自身によるパステル画を見事にシャロットの女の心象風景を投射する方法として取り込んだプレゼンは参加者の活発な論議の起爆剤となり、学生にとっても詩を分析する楽しさを実感するワークショップとなりました（いずれのプログラムも詳細は教養研究センター Web の教育 GP サイトに掲載されています）。　（不破有理）

日吉ポエトリー・フェスティバル

昨年6月の小さな朗読会に続いて、今年度は HAPP 主催で詩のお祭りを開催しました。テーマは言語を横断する詩の試み。10月27日は英語詩人の中保佐和子さん（東京大学特任講師）による現代詩の朗読ワークショップ。約20名の参加者が、日本語と英語を交えながらグループによる朗読、体の動きに反応する朗読を実験しました。29日、肌寒かった来往舎イベントテラスでの朗読会は、オープン・マイクで幕を開けました。主催者の予想を超える13組が参加、多言語の朗読だけではなく音楽や振り付けのパフォーマンスも加わり、イベントを盛り上げました。ゲストの詩人はフォレスト・ガンダーさん（ブラウン大学教授）、野村喜和夫さん、中保さん、永井真理子さん（テンプル大学助教）、フランク・ヴィランさん（早稲田大学准教授）の5名で、日本語・英語・フランス語で自作品を披露しました。最後にはガンダーさんと野村さんの英和デュエット朗読で幕を閉じました。　（吉田恭子）

2010年度日吉キャンパス公開講座

日吉キャンパス公開講座では、秋季講座「読むことの過去と未来」を開講しました。これは9月25日より12月11日までの土曜日3・4時限、10日間計20コマにわたる有料のオムニバス講座で、講師は塾内を中心に内外より招き、義塾における研究活動の成果を広く学外へ向けて発信することを主目的としています。本年度は「読む」という行為へ目を向け、その再検討を試みました。「読む」というごく日常的な営為は、電子出版の急速な普及につれ、いま大きく様相を変えつつあります。講座では、粘土板やパピルスの時代から活版印刷の発明をへて現在にいたる「読む」メディアの歴史、さまざまな時代・文化圏における「読む」という営みの変転、「読む」ための芸術である文学とそれを「書く」という行為の検討などをはじめ、20組の講師陣が多彩な講義を行いました。　（坂本　光）

秋学期の HAPP の活動

2010年度秋学期において慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会（以下 HAPP）は、春学期中に公募、採択を決定した企画の実行を核として活動を行ってきています。今年度採択された公募企画は、学生企画が5つ、教員企画が2つの計7つでした。それぞれの企画には異なった趣向が見られ、複数のイベントに来場している学生・教職員・地域住民の方々も多いようです。HAPP の公募企画は、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということに確実に貢献していると思われます。

企画の内容には、来往舎イベントテラスで行われた演劇、大道芸とマジックが中心のパフォーマンス、来往舎ギャラリースペースでのアート作品の展覧会に加え、グランドで行われたブラインドサッカー体験を含むフットサルの大会、さらには来往舎の外に設置された建築オブジェの展示があり、すべて意欲的な企画でした。

秋の企画についての詳細は、HAPP のホームページ（http://www.hc.cc.keio.ac.jp/happ/）で見ることができます。（石井　明）

学び場プロジェクト

日吉図書館を入ると、正面やや左側のレファレンス・カウンターに並んで座っている３人の姿が目に飛び込みます。メディアセンターのレファレンス担当職員と、図書館内のパソコン周りの相談に応じる日吉 ITC 学生コンサルタントに挟まれて、真ん中に座っているのが、教養研究センター・日吉メディアセンター共同事業「学生の学習環境を考えるプロジェクト（学び場プロジェクト）」の担い手の学習相談員（ピア・メンター）です。彼等は、教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」の修了生で、授業を通して得たスキルを生かして、「レポートって何？」「自分のオリジナルな問題ってどうやって見つけるの？」などといった、大学１・２年生がぶつかりやすい、レポート作成に関する悩みに答えています。教員によるレポート指導とは異なった、現に汗を流してレポートを書いている学生ならではのアドバイスは、慶應義塾により充実した学習環境をもたらしてくれるものと思います。先生方もどうぞご担当の学生にご紹介下さい。

学習相談期間：10/4（月）～ 1/19（水）

実施曜日・時間　月～金　1：00 pm ～ 6：00 pm　（水曜日のみ　～ 5：30 pm）

（種村和史）

庄内セミナー

２回目となった今年度も教養研究センター主催・東北公益文科大学共催で庄内セミナーを開催しました（参加者は慶應 18 名、公益大６名、慶應卒業生１名）。セミナーは８月 31 日から９月３日までの公益大酒田キャンパスを基地とした庄内での合宿セミナーと 11 月 13 日日吉での報告会から構成されています。学生たちは両校交じり合って４つのグループに分かれ、慶應（経済）卒業生の西村崇君が全体の統率役を務めながら、グループワークを行いました。

「芭蕉が見た庄内の生命（いのち）」をテーマに、特に松尾芭蕉の『おくのほそ道』に描かれた庄内についてさまざまな角度から体験的に学びました。芭蕉を中心に俳諧の世界については俳人で俳句結社「海程」同人の柳生正名氏、『おくのほそ道』から読み取れる庄内の多彩な相貌については、芭蕉をはじめとして江戸の旅のあり方に詳しい作家の金森敦子氏に講演・講義していただきました。さらに一般公開した講演では、セミナーの連続性を保証する意味も考慮して、昨年度取り上げた徂徠学について、福澤諭吉との関係を軸とした講演を経済学部長の小室正紀氏にお話しいただきました。

さらに芭蕉の足跡を辿って象潟まで足をのばしました。途中、三崎公園では芭蕉が歩いた旧道を歩み、象潟郷土資料館では斎藤一樹学芸員の案内のもと、芭蕉当時の象潟を描いた貴重な象潟図屏風のオリジナルを見せていただきました。クライマックスは、蚶満寺と象潟九十九島――芭蕉が見た風景を体に染みこませました。また、山伏の案内による羽黒山登山、出羽三山博物館見学、そして、酒田市内でのフィールドワークなどを行い、３日にはグループごとの中間報告がなされました。

その後、グループごとに連絡を取り合いながら、最終報告を目指したグループワークを継続し、11 月 13 日の報告会では３グループが地域の活性化という観点から酒田市の未来構想、歴史を踏まえた最上川の将来的な利用策、新種米「つや姫」の知名度向上に関する方策提言、１グループが豪商本間家中興の祖・光久の再評価を行いました。また、OB の西村君が単独で行った、芭蕉の「不易流行」と酒田商法を結び付けたプレゼンも大きな反響を呼びました。コメンテーターとして参加された柳生氏、金森氏、小室氏のほか白迎玖氏（公益大）、高橋幸吉氏（商学部）からは厳しくも好意的なコメントをいただき、報告会は無事終了しました。お忙しい中をご挨拶いただいた酒田市副市長・本間正巳氏をはじめとして、酒田市、鶴岡市などご協力いただいた関係者の皆様、取材していただいた荘内日報、山形新聞の方々、本当にありがとうございました（荘内日報 11 月 18 日版、山形新聞 11 月 14 日版に掲載）。

なお、セミナー関連企画として、地元から伝承の会の方をお招きして、酒田に伝わる鵜渡川原人形の展示・講演・ワークショップも行いました。また、庄内観光コンベンション協会、大学生協のご協力で庄内フェアを開催、庄内米おにぎり、いも煮、ご当地スナックの販売、庄内に関わる書籍類の展示・紹介も行いました。企画にご協力いただいた方々にもあらためて感謝いたします。ありがとうございました。

（羽田　功）

庄内セミナー講義

庄内セミナー最終報告会

1月

慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会　1月12日開催
ハイドン《天地創造》ほか

日吉で「音楽」の授業を履修する学生が、ハイドンの《天地創造》第2, 3部からなどの、合唱とオーケストラの音楽を演奏します。今年度の授業では、教育GPの企画の一環として、言語文化の深み・歴史の重みを、音楽という身体芸術で実現するということに主眼をおいてきました。

クラシック・ヨコハマ2010の「大学連携コンサート」として横浜市や地域の方々とも協力をいただきながら、本格的音響のすばらしいホールで、学生たちが、1年間の音楽の学びの成果を披露します。

日時：2011年1月12日（水）18:00開場、18:30開演
場所：協生館　藤原洋記念ホール
入場無料・当日一般先着300名

（佐藤　望）

基盤研究
「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」新グループ発足

今年度の基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」は今までよりメンバーを少し絞り、新研究グループ（座長：伊藤行雄・経済学部）を編成しました。

同研究の長年の研究成果が、学部共通カリキュラム委員会、日吉共通カリキュラム検討委員会の発足に結びつくなど、これまで同研究で積み重ねてきた様々な提言は教育・組織のなかで少しずつ実現化の方向に向かっています。

現在、基盤研究が行ってきた提言をふまえて、新たなグループでは、それぞれの教員が思い描く理想の大学教育像がどのようなものか、を描き出すことを主な目的とし、教員を対象とした大学教育カリキュラムに関するアンケート調査を実施する準備を現在進めています。2010年度末にアンケートを実施し、2011年度に集計・分析作業に入る計画です。研究成果は、次年度中に報告書・シンポジウムなどで公表する予定です。

（伊藤行雄）

2月

教員サポート

今年度も、学生部・学生相談室との共催にて教員サポートワークショップを開催します。日頃、学生の悩みに向き合うカウンセラーのお話を聞くことで、教員としての学生の接し方について有益な示唆を得られるものと思います。どうぞご参集下さい。

日時　2011年1月14日（金）午後6時30分～
担当　讃岐真佐子カウンセラー
題目　「学生相談室から垣間見る昨今の慶應生の姿
　　――同質集団の中の孤独――」
開場　来往舎2F大会議室

（種村和史）

サイエンス・カフェ

2007年の初夏に開業して以来、約3年半で20回のカフェを開催しました。毎回40名前後のお客様がサイエンス談義を楽しみに来られています。ナマの情報に触れることで、この世の中に満ちあふれる「面白さ」と、その「わからなさ」がよくわかる、そういう場を提供しています。次回（第21回）は、2月5日（土）午後2時から、来往舎シンポジウムスペースにて、お話は松本緑さん（理工・生命情報）、テーマは不思議な生き物の「プラナリア」です。

（鈴木　忠）

アカデミック・スキルズ
プレゼンテーション・コンペティション

今年度もアカデミック・スキルズを締めくくるイベントとして、2011年2月7日（月）15:00より来往舎シンポジウムスペースにて、プレゼンテーション・コンペティションが開催されます。熱気に包まれた会場で、各クラスから選抜された6～7名の代表者が、熱いプレゼンテーションバトルを繰り広げます。みなさんも、この熱いバトルの目撃者として、そして、審査員としてコンペに参加してみませんか。アカデミック・スキルズ受講者、担当教員一同、みなさまのお越しを心よりお待ち申し上げています。

（篠原俊吾）

私の家族（マルマル）自慢

あけましておめでとうございます。
今年は兎年、兎は跳ねると言われておりますので、ここ数年続いている停滞した世の中の雰囲気が、少しでも明るくなることを願っております。
さて、我が家はといいますと、毎年、猫年です。アメショーの11歳の女の子を筆頭に、7匹の猫達に囲まれた日々を送っております。
7匹それぞれ性格や好みが違うので、見ていて飽きません。
猫は縁起の良い動物と言われています。
その猫が7匹もいる我が家は七福神が、いつも家の中にいる様な感じかもしれません（やや乱暴な七福神ですが…）。
この子達が私の自慢の家族です。
兎年の飛躍と合わせて、良いことが沢山ある1年にしたいです。
皆様、宜しくお願い致します。

（坂口園美）

ReCLA Newsletter
2011. January No.17

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts）
発行日：2011年1月15日　代表：不破有理
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1　TEL：045-566-1151　Email：lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/